

# 東海学院大学・東海学院大学短期大学部公開講座 2018

## 「豊かに生きる ～大学は知の宝庫～」

第9回 12/18 (火) 13:30～15:00 報告

オペラの楽しみ ～「ジャンニ・スキッキ」初演 100 周年～

講師 菅野道雄 (本学教授)

於：図書館大セミナー室

\*◆◆◆\*◆◆◆\*◆◆◆\*◆◆◆\*◆◆◆\*◆◆◆\*◆◆◆\*◆◆◆\*◆◆◆\*

平成 30 年度第 9 回公開講座が 12 月 18 日 (火) 13 時 30 分から東海学院大学図書館大セミナー室にて開催されました。

今回は、東海学院大学人間関係学部子ども発達学科の菅野道雄先生による「オペラの楽しみ ～「ジャンニ・スキッキ」初演 100 周年～」と題し、31 名の方が参加されました。最初に歌劇「ジャンニ・スキッキ」が作られた経緯やあらすじについて簡単に話がありました。

近代イタリアを代表する作曲家であるジャコモ・プッチーニ (1858-1924) は、1912 年、パリでディディエ・ゴルドの戯曲「外套」を見てこれをオペラにすることを考え、上演 1 時間ほどの 1 幕のオペラになりました。同時にプッチーニが兼ねてから構想していた、同じような短いオペラを 3 つ一晩で上演する「三部作」に向けて、残りの 2 作を若手台本家に委ねました。どこまでも暗い悲劇「外套」に続いて魂の救いが涙を呼ぶ「修道女アンジェリカ」、最後にプッチーニ唯一の喜劇である「ジャンニ・スキッキ」と、暗から明へと移っていく構成となっています。今回その「三部作」のなかの「ジャンニ・スキッキ」の上映を約 1 時間鑑賞しました。

これまで毎年、音楽についての講座を開催してきましたが、今回の講座は“オペラを単純に楽しもう”ということをも motto に難しい話は短めにし、上映中心の講座を行いました。

「ジャンニ・スキッキ」のあらすじは、13 世紀末、イタリアのフィレンツェの富豪ブオーゾ・ドナーティの死を親族が集まって悲しんでいる場面から始まります。しかし、その悲しみは表面的であり、関心事は死者の莫大な遺産の行方であり、遺産を全額寄付するという噂があったため気になってしょうがありませんでした。なんとか遺言書を探し出し、その内容が噂通りであったと知り、親族みんなががっかりとするのでした。そこに、親族の若者リヌツォの恋人の父親であるジャンニ・スキッキが登場します。若者はこの成り行きを予測して、あらかじめ頭の切れるジャンニ・スキッキを呼んでいたのです。親族はジャンニ・スキッキの力を借りることに大反対します。その態度に腹を立てたジャンニ・スキッキは帰ろうとしますが、娘の説得もあり、話に乗ることとなりました。ここから、ジャンニ・スキッキの大芝居が始まります。死者に成りすまして偽の遺言書を作らせます。公証人に口述筆記をさせていくのですが、最初のうちはそれぞれの望み通りに進みますが、最後に残った高額な遺産に至って、それは「友人ジャンニ・スキッキに」と言い出します。一同怒りに震えますが、あらかじめ「遺言の偽造は大罪、ばれたらフィレンツェには居られなくなる」と念を押されていたため、声を出して異議を唱えることができません。公証

人が帰った後、親族はジャンニ・スキッキに詰め寄るもののあとの祭り、逆にすごすごと追い出されてしまうというストーリーでした。

今回、DVDの上映でしたが、バス、ソプラノ、メゾソプラノの主演級の歌手の圧倒的な声量に魅了されている参加者もいらっしゃいました。DVDで魅了されるくらいですから、実際目の前で鑑賞できると迫力はすさまじいものなのかなと思います。内容についても、どの時代どの国であろうと抱える悩みは同じであり、とても共感もてるものでした。上映終了後、参加者から大きな拍手が起こる場面も見られました。参加者にとって午後のひととき有意義な時間が過ごせたのではないのでしょうか。

今年度最後の公開講座にふさわしい講座でした。来年度も豊富な内容を取り揃えていきたいと考えております。すべての講座をとおして、ご参加、ご静聴いただき、ありがとうございました。

#### 【講座の様子】

